



すずかけ

創立50周年
特集号

第40号 平成25年11月20日 発行／鳥取県立厚生病院 編集／院内広報委員会

50周年を迎えて

昭和5年6月、日本初の産業組合立病院として「有限責任利用組合厚生病院」が開設されました。昭和38年4月には、県に移管され、鳥取県立厚生病院として、許可病床200床で診療を開始し、本年で50年が経過しました。11月23日には、平井知事をはじめ、多くの関係者のご来臨を仰ぎ、記念式典と祝賀会を開催いたします。

鳥取県立厚生病院の50年の歴史は自治体病院として医療行政との整合性を図りつつ、住民ニーズの拡大を背景に、中部医療圏で良質な医療を提供し続けることに懸命な努力と自己改革を重ねた職員の歩みであります。もちろん、行政の的確な指導、鳥取大学医学部および附属病院との良質な関係、病・診、病・病連携推進を主導していただいた中部医師会関係者のご尽力等が大きな役割を果たしてきたことを忘れてはなりません。

四十にして惑わず、五十にして天命を知る、と言いますが、現代社会の潮流は激しくなっており、特に、少子高齢化がその流れに棹をさして、医療・介護制度改革を加速しています。天命を知ることはないのです。

「変わらぬもの」、それは信頼される良質な医療を絶えず提供することでありま。50周年を迎えた今こそ、鳥取県立厚生病院の基本理念を改めて想起すべきでありましよう。

「思いやりと優しさ、真心のこもった信頼される病院」、「優れた医療を提供し、地域と密着した病院」、「職員の和を尊び、働きがいのある病院」。この基本理念を実現し、深化させることこそ、私どもの使命なのです。

院長 井藤 久雄

第40号の内容

巻頭言「50周年を迎えて」	…1	ふれあいハートまつりに出展！	…6
50年のあゆみ	…2	クリーンアップ作戦Vol.2活動報告	…6
感染防止対策の取り組みのご紹介	…4	夏を彩る七夕飾り	…6
DMAT広域医療搬送訓練に参加して	…4	如春会活動報告	…7
ヘリポート運用状況のご報告	…4	自治労スポーツ大会戦績報告	…7
市民公開講座開催報告	…5	新任医師、退職者の紹介	…8
今後の市民公開講座開催のお知らせ	…5	編修後記	…8

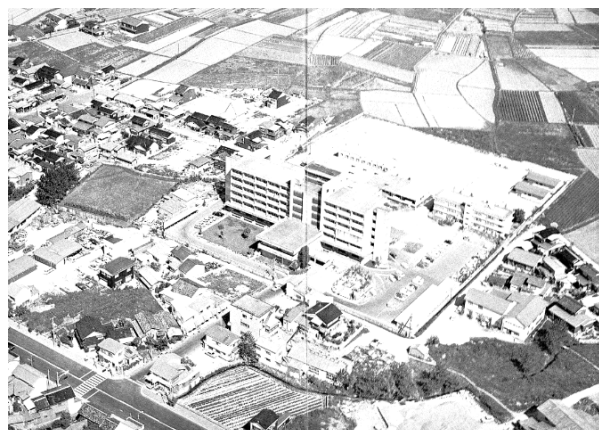
50年のあゆみ

県立厚生病院の前身は、昭和5年に日本初の産業組合立病院として開設された「有限責任利用組合厚生病院」です。その後厚生農協連合会を経て、昭和38年4月に県に移管されました。

(右の写真は、移管当時の厚生病院の正面写真です。当時は倉吉市越殿町に位置していました。)



県移管に際しての議論の過程で、医療の近代化のため、移転新築も併せて計画され、昭和38年12月に倉吉市下田中（現在地である倉吉市東昭和町）に新病院が完成しました。

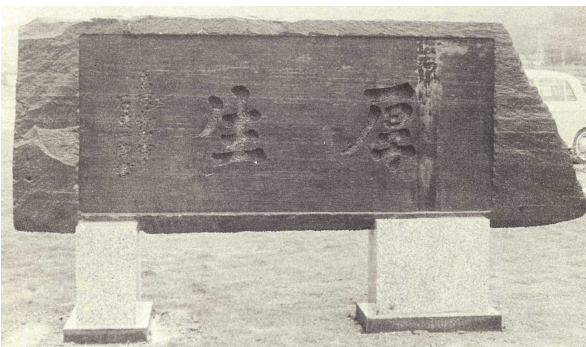


当時の新聞によれば、新築された病院は「中四国随一を誇る」施設として紹介されています。

(左の写真は、昭和38年12月に移転新築された厚生病院の航空写真です。今はほとんどない田園が周囲に広がっています。)

なお、新築移転の際に県中部に位置することから「中部病院」への改称が検討されたようですが、前身病院の設立に奔走された先人達の「厚生」の2文字にかける熱い思いを汲み、移管後も厚生病院の名前が受け継がれ、今日に至っています。

9診療科、200床、医師10人、看護師57人を含む総勢120人の県立厚生病院は、50年の時を経て、20診療科、304床、医師46人、看護師267人を含む総勢500人余の職員を擁する病院に生まれ変わりました。この間、増床、増築、改築、機器整備等を行い、地域の医療機関とともに中部地域の医療発展の一翼を担ってきました。



以下に年表とともに主なできごとを写真等を交えて紹介します。

<年表>

- | | |
|-------|---|
| 昭和5年 | 本院の前身となる「有限責任利用組合厚生病院」開設 |
| 昭和38年 | 県に移管。鳥取県立厚生病院開設（内科、外科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、理学診療科小児科、皮膚泌尿器科、整形外科の9科を標榜）
※同年に現在地に新築移転（200床） |
| 昭和61年 | 増改築工事竣工、一般病床増床し、300床で運営開始 |
| 平成11年 | 知事から災害拠点病院（地域災害拠点病院）の指定 |
| 平成15年 | 厚生労働大臣から臨床研修指定病院、地域がん診療連携拠点病院の指定 |
| 平成19年 | 外来・中央診療棟新築、電子カルテ稼働 第1種感染症指定医療機関の指定 |
| 平成22年 | 消化器内科を開設し、現在の20診療科体制が整う |
| 平成25年 | 放射線治療棟増築 新リニアック稼働 |

<昭和61年 現病棟完成>



医療の進歩に併せ必要となった機能を整備するため、昭和56年に県立病院運営審議会より整備計画が答申され、昭和58年の実施設計を経て昭和61年3月に新病棟が竣工しました。

左は、竣工当時の新聞記事（新日本海新聞社提供）の一部ですが、このときにCT等、現在の医療に欠かせない診断機器が導入されました。

<平成19年 外来・中央診療棟完成>



平成7年1月17日に発生した兵庫県南部地震（阪神淡路大震災）を契機に公共施設の耐震性の問題が全国的に大きくとりあげられるようになりました。

その後行われた調査で厚生病院の旧館も施設耐震性に問題があることがわかり、併せて施設老朽化・外来診療等の狭隘といった課題もあり、旧館に替わる施設整備の議論が平成12年頃からはじまりました。

もあり、なかなか整備に踏み切ることができませんでした。そのような中で整備に向けた一歩を踏み出すことができたのは、地元の住民の方々、行政関係者の強い後押しをいただいたことに併せ、地元医師会のご理解を得たことが大きかったと当時を振り返ってしみじみ感じます。

平成19年5月に完成した外来・中央診療棟では外来、手術、透析が一新されたほか、翌年には病棟改修も行われ、集中治療室及び当院の大きな役割の一つである分娩部門の充実が図られました。

<平成25年新リニアック稼働>

当院の特徴的な機能の一つは、がんの放射線治療です。この治療の一層の充実のため、平成23年度から24年度にかけて地域医療再生基金を活用し、新型の放射線治療装置（リニアック）を整備しました。これにより大腸等、より深部の組織のがんへの放射線治療も可能となりました。



以上50年の歩みを主に施設・設備の転機を捉えてご紹介しましたが、いずれの整備も県立病院として地域の方々の生命と健康を守るため行われてきました。これからも理念である「思いやりと優しさ、真心のこもった信頼される病院」を胸に、医療の進歩に意を払いながら歩を進めてまいります。

事務局長 飯田 綾子

感染防止対策の取り組みのご紹介

感染防止対策の充実、推進を目的として、平成24年度より感染防止対策の活動が大きく様変わりしました。一つには地域の医療機関（三朝温泉病院、藤井政雄記念病院、野島病院）と定期的にカンファレンスを開催し情報交換、感染防止対策の確認を行うこととなりました。また、東部圏内の大規模な医療機関（鳥取県立中央病院、鳥取市立病院、鳥取医療センター、鳥取赤十字病院）との間で、年1回互いの病院に赴き、感染防止マニュアル等の確認とともに院内ラウンドにより感染防止対策のチェックを行っています。これにより、第三者の視点を活かした感染防止対策に取り組んでいます。

今年、10月3日に鳥取市立病院の医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師の総勢4名の職員により院内ラウンドを実施いただきました。器機のメンテナンスに関する指摘はありましたが、概ね適切との評価をいただきました。また当院からも9月12日に医師、看護師、薬剤師等総勢5名のチームで鳥取医療センターに赴き取り組み状況の評価を行いました。

今後も医療機関相互の情報交換、チェックにより感染防止対策の強化に努めていきます。
医療安全・感染防止対策室 福井 昭裕

DMA T 広域医療搬送訓練に参加して

愛知県、三重県、和歌山県域を対象に南海トラフ大地震を想定した「広域医療搬送訓練」（8月31日実施）に参加しました。

災害時は、医療ニーズの増大により、被災地内では人や物などの医療資源が不足します。現地では適切な処置が行えず「救える命が救えない」ということが発生しかねません。このため、現地では応急的な処置にとどめ、救急車やヘリ、航空機などを用いて、適切な医療が行える場所へ速やかに患者を搬送し、膨大な医療ニーズを広域的に補う対応が必要となります。

今回の訓練で厚生病院DMA T隊は、名古屋市内の病院を支援し、患者を救急車で搬送したり、市内の病院から航空機を利用して被災地外へ搬送するためのサポートを行いました。大規模災害で携帯電話は使えない想定だったため、情報収集や伝達に大変苦労しましたが、学ぶことが多く、有意義な訓練となりました。この貴重な経験を実際の活動に活かしていきたいと思えます。



想定だったため、情報収集や伝達に大変苦労しましたが、学ぶことが多く、有意義な訓練となりました。この貴重な経験を実際の活動に活かしていきたいと思えます。

中央検査室 臨床検査技師 道祖尾 憲二郎

ヘリポート運用状況のご報告

当院には外来・中央診療棟の屋上にヘリポートが設置されています。ヘリポートがあることで、救急現場から当院までの患者搬送時間が短縮され、また当院で対応困難な患者をより高次の医療機関へ迅速に搬送することができます。

ヘリコプターで搬入される症例では、中部山間部や海岸で発生した疾患や外傷例が、また搬出では出産に危険を伴う妊婦症例や心臓・胸部の大血管の疾患で緊急手術が必要な症例が多く、中央病院や大学附属病院のほか隣の病院へ搬送することもあります。

ヘリ搬送の利点はなんといってもその速さにあります。当院までのヘリ搬送の時間は、海岸線より2分、三徳山より5分、また搬出の場合は中央病院まで15分、米子港（大学附属病院）まで20分と車両での搬送より明らかに早く、治療開始までの時間短縮効果は非常に大きいものがあります。三徳山登山中に急性心筋梗塞を発症された方を当院にヘリ搬送し、心臓カテーテル検査と冠動脈ステント留置術によって一命を取り留めることができました事例がありますが、これなどはヘリ搬送の効果が示された代表例といえます。

ヘリ搬送は、平成23年度16例、平成24年度10例と1か月1例程度の利用で推移していますが、ヘリポート運用は、中部圏域の救急医療の質を維持するために極めて重要なことと考えていますので、引き続き皆様の御理解と御協力をよろしくお願い致します。

集中治療室部長 浜崎 尚文



市民公開講座開催報告

平成25年度第2回目の市民公開講座は、「肝臓がんのはなし」と題して、9月8日（日）に消化器内科、放射線科、消化器外科のそれぞれの観点から当院医師3名が治療の実際の画像を用いながら治療方法を解説しました。

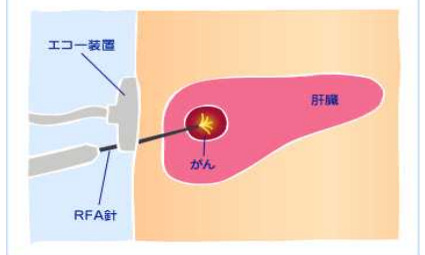
150名分準備した聴講席が開始まもなく満席となり、追加の席を急遽準備するなど大盛況の公開講座となりました。

3人の医師の講演の概略をお伝えします。

○消化器内科 万代 真理 医長（「肝臓がんの検診と内科的治療」）

- ・アルコールや脂肪肝は肝がんの主要な原因の一つ。飲酒は適度な量の心がけが重要。
- ・飲酒歴のある方、肝機能障害を伴う脂肪肝のある方は、半年に一度は腹部超音波検査の受診を推奨
- ・肝臓がんの内科的治療として、肝臓に電極を刺しラジオ波でがん組織を焼くラジオ波焼灼術と肝臓のがん組織に局所的にエタノール注入して死滅させる経皮的エタノール局注療法を実施。負担が比較的小さく根治率も高いが、がん組織の大きさ等により治療の制約もある。
- ・肝臓がんは、ウイルス性肝炎、飲酒、脂肪肝が原因。これらに該当する方はきちんと定期検査を受けて早期発見することが大切。

図1 ラジオ波焼灼療法



○放射線科 遠藤 雅之 副医長（「肝臓がんの経カテーテル治療」）

- ・放射線科では、肝臓内の血管にカテーテル（細い管）を挿入し、がん組織周辺の血流を阻害したり、薬剤注入することにより、がん組織の死滅を図る肝動脈化学塞栓療法及び肝動脈内注入化学療法を実施。
- ・これらの治療では、体への負担が小さい、腫瘍の数が多くてもまとめて治療できる等のメリットがあるものの根治率がやや劣る面がある。



○消化器外科 岩本 明美 医長（「肝臓がんの外科治療」）

- ・肝臓は、血管の塊のような臓器で以前は大量出血を前提とした手術だったが、現在は無輸血手術がほとんど。
- ・三次元の画像情報によるナビゲーションの活用など技術の進歩で安全性が大幅に向上。
- ・負担や術後の痛みの少ない腹腔鏡下手術も実施。
- ・がんをきちんと取り除くこと、元気に家に帰っていただくことを目標に外科治療を担当



肝臓がん治療は、治療アルゴリズム（ケースごとの治療適応表）をもとに、内科的、外科的、放射線的の方法が選択されますので、上記のうちのどれが一番よいというものではありませんが、この講座を通じて、多くの方に肝臓がんの治療法の一端を知っていただくとともに、予防・早期発見の意識喚起の契機となったことを願っています。

中央手術センター長 吹野 俊介

【今後の市民公開講座開催のお知らせ】

日時 平成26年3月9日（日）午後1時30分～4時

場所 倉吉交流プラザ2階視聴覚ホール

講座名 「生活習慣病とがん」（仮題）

生活習慣病の予防・診断治療について、また生活習慣病とがんと関連について、当院の専門医による講演を予定しています。

その他 定員150名、無料

ふれあいハートまつりに出展！



社会医療法人仁厚会、社会福祉法人敬仁会主催による「ふれあいハートまつり」（6月1日開催）に参加し、当院糖尿病委員会を代表して、栄養士、看護師、技師、薬剤師とともに計6人で、「糖尿病血糖測定コーナー」を出展しました。

当日は、血圧測定、血糖測定、体重測定とその結果説明、生活指導のほか、フードモデルを使用しての栄養指導を行い、多くの方に来場いただきました。血圧測定器は容易に手にはいることからお持ちの方が多かったようですが、自己血糖測定器は薬局での購入で高価なため持っておられる方は少なく、興味を持って測定していただきました。また、多くの家庭に体重計はありますが、測定を毎日の習慣にしている方は少なく、体重管理意識を高める上で毎日の測定

が有効なことをお伝えしました。数値化して自分の状態を確認することで生活改善の目標値を設定しやすくなり、関心も高まると考えており、そういったことを短時間でしたがお伝えできたのではないかと思います。また、フードモデルを見て頂くことで1食分の食事量とそのカロリーを具体的に知っていただけたのではないかと思います。生活習慣病は、一人一人が関心を持つことで発症を予防したり病状を改善できたりする疾患であることを、今後もこういった場を通じて伝えていきたいと考えています。

内科 村脇 あゆみ

クリーンアップ作戦Vol.2 活動報告

10月19日（土）にクリーンアップ作戦Vol.2として、患者サービス改善委員会の発意で職員有志により厚生病院周辺の清掃活動を行いました。

「Vol.2」の名のおり昨年につき今回2回目の活動でしたが、お孫さんなど家族連れもあり、総勢60名程度の参加を得て行うことができました。

昨年も感じたことですが、昭和町周辺は住民の方々が家の周りを綺麗にしておられ、極端に目立つゴミはあまりありませんでした。

でも、1時間ほどの活動でしたが、タバコの吸い殻や空き缶、破れたビニール傘の部品など大きな袋5つほどのゴミを拾い集めることができました。

これからも昭和町地域で事業活動を行う一員として、本業の医療提供だけではなく、清掃活動など地域貢献も続けていきたいと思っています。

地域連携センター 小原 佐智子



夏を彩る七夕飾り



本年も7月1日から8日までの1週間にかけて、正面玄関のホール、全ての入院病棟とすずかけサロン室で七夕飾りを行いました。たくさんの患者さんやご家族の皆様が、願い事を短冊にしたため飾ってくださいました。

「〇〇のゲームがほしい」、「元気な赤ちゃん早く出ておいで」、「おばあちゃん早く元気になってね」と微笑ましいもの、「家族と一緒に食事をしたい」など闘病されている患者さんの願いが飾られていました。特別なことではなく、家族と一緒に家で過ごせられる事が幸せであり、皆様の願いであると短冊を拝見して改めて感じました。

ささやかな催しですが、患者サービス改善委員会では、七夕飾りや12月19日（木）に開催するクリスマス会などをおして季節を感じていただければと思っています。

医療情報管理室 山田 昇

如春会活動報告

厚生病院では、職員相互の親睦、文化の向上、福利厚生などを目的とした親睦会「如春会（じょしゅんかい）」が組織されています。年間を通じて様々な活動を行います。今年度はこれまでに次のような取り組みを行いました。

●みつぼし踊り大会への参加

8月3日、「倉吉打吹まつり「みつぼし踊り大会」」に参加しました。今年度は総勢130名の参加であり、参加連の中でもひととき目立つ巨大チームとなりました。残念ながら入賞は逃しましたが、郷土の伝統的な盆踊りを皆で揃って踊ることで、職員相互の交流の輪がますます広がりました。



●職員旅行の実施

秋から冬にかけて実施する職員旅行は、勤務中には交わせない様々な語りを通じて互いを理解しあう良い機会となっています。今年度は7ツアーを企画され、これまでに、9月7日には阪神エリア方面ツアー、10月5日には滋賀県方面ツアー、10月12日にはゴルフツアーが実施され、職員相互の親睦を深めています。



●球技大会の開催

10月19日、所属対抗のソフトバレーボール大会を開催しました。対抗戦ならではの熱戦が繰り広げられ、優勝：手術室、準優勝：集中治療室という結果となりました。応援含め100名以上が熱い声援を送りましたが、ひとたび勝負がついた後は互いに健闘をたたえ合い、職員相互の結束を一層強めたところです。

自治労スポーツ大会戦績報告

今回、自治労スポーツ大会＜軟式野球＞に参加し地区予選、県大会を勝ち抜き、中国地連大会（7月27日）に出場してきましたので戦績を報告させていただきます。

会場は山口県宇部市にありますユーピーオールスタジアムでした。プロ野球の試合も行われるとても綺麗なスタジアムです。

1回戦は30度を超える猛暑の中、広島市職労と対戦しました。さすがに広島代表だけあって強く、3回に2点を先制される厳しい展開でしたが、その裏に逆転し2対3で勝利することができました。続く2回戦は連戦の疲れからか山口県職労に惜しくも4対3で惜敗しましたがチームは中国地区ベスト8という成績をおさめることができました。



来年度も予選を勝ち上がり中国地連大会、全国大会と進めるように頑張りたいと思います。
臨床工学室 山根 雄介

新任医師紹介

小児科
岡本 賢(副医長)



八月一日付

【ひとこと】

厚生病院で生まれ、倉吉市昭和町で育ちました。十五年ほど東京で暮らし、五年前に鳥取県に戻りました。地域医療のため日々精進してまいりますので、よろしくお願ひ申し上げます。

産婦人科

野中 道子(副医長)
十月一日付



【ひとこと】

鳥取の中央病院よりまいりました。厚生病院は分娩件数が多く、大変さがあります。大きなやりがいがあります。皆様の役に立てるよう頑張りますので、よろしくお願ひ申し上げます。

小児科
上桝 仁志(専攻医)



十月一日付

【ひとこと】

大学六年間を富山で過ごした後、今年九月まで鳥取大学の小児科に在籍していました。厚生病院の一員として早く慣れ、診療で貢献できるように頑張る所存ですので、よろしくお願ひします。

外科

小林 太(専攻医)
十一月一日付



【ひとこと】

十一月からお世話になりました。出身は境港市です。まだまだ未熟ですが、頑張りたいと思ひますので、よろしくお願ひ申し上げます。

研修医
藤井 政至



矢野 民雄



退職者

医師

内科

山本

了(七月末付)

小児科

坂田

晋史(九月末付)

外科

倉敷

朋弘(六月末付)

お世話になりました

(編修後記)

すずかけ通りのプラタナスもすっかり色づきましたが、今年あまり秋を感じることなく冬の気配が漂い始めました。皆様いかがお過ごしでしょうか。今回の「すずかけ」は発刊から40号目で、厚生病院創立50周年特集号という節目となりました。人は50歳になると家の中で杖をつくことを許されたことから杖家(じょうか)などと言われますが、病院は常に時代に即した対応を迫られ、逆に杖の必要のない体力を要求されます。「教書」に民を養う道を説いて「正徳利用、厚生惟和(徳を正しうして用を利し、生を厚うしてこれを和し)」とあります。民の生活を厚(ゆた)かにすることが厚生です。今後は高齢化した社会が高齢化する「超高齢社会」をむかえようとしています。医療の形態は大きく変化していくなかで、救う医療と支える医療の二極化が顕著となることでしょうか。院内の取り組み、行事、親睦会報告を載せています。関係各位の努力に感謝いたします。新任の医師の一言を載せています。よろしくお願ひいたします。最後になりましたが、次の50年、さらにはその先の50年と、厚生の理念のもとに厚生病院の使命が引き継がれていくものと思ひます。

(秋藤)

発行 〒682-0804

鳥取県倉吉市東昭和町150番地

鳥取県立厚生病院(電話 0858-22-8181(代))